

CAN

それらは永遠に繰り返し聴かれるためにあるのだ。

CAN=缶であり、トルコ語のCAN=「魂／生命」であり、CAN=英語の「できる」であり、CAN=日本語の「感／勘」であり、C=コミュニズム・A=アナキズム・N=ニヒリズムなど諸説あるのだが、やはりCAN=缶だろう。ロックからジャズ、現代音楽から民俗音楽まであらゆるものが詰め込まれたこの缶＝バンドは、1968年という革命の年、西ドイツのケルンにて始動した。クラシックを学び、電子音楽の父シュトゥクハウゼンにも師事したイルミン・シュミットとホルガー・シューカイ、ジャズ・ドラマーとして活動していたヤキ・リーヴェツァイトという、すでにそれぞれの道でそれなりのキャリアを歩んでいた3人が10歳ほど年下のロック青年、ミハエル・カローリと組んだロック・バンドだった。

とはいえCANは、とてもじゃないが、ありがちなロック・バンドではなかった。ドラマティックな展開よりも反復を好み、お決まりのメロディよりも斬新な音響を優先させた。メッセージなんぞ歌わない。音そのものがメッセージでありコンセプトだった。2トラックのレコーダーで可能性の宇宙を旅しながら、演奏のスキルを見せびらかさず、スタジオワークを追求した。神聖さを放棄し、遊び心を尊重した。実験的かつチャーミングで、知性とユーモアを携えていた。権威になることを忌避するように、ややずっこけたアートワークを好んでもいる。

CANほど先走りしたバンドはいない。その証拠に、同時代よりもむしろ後の世代への影響のほうが大きい。パンクからポストパンク、ヒップホップ、テクノ、そしてポストロック、たとえばジョン・ライドンからトーキング・ヘッズ、ソニック・ユースからスティーヴ・アルビニ、ボーティスヘッドからレディオヘッドまでと、多くの作品／アーティストのインスピレーションとなっている。というのも、いまだCANにしかない魅力があり、それらは永遠に繰り返し聴かれるためにあるのだ。

野田努(ele-king)

"CAN以前とCAN以後"での
ロック音楽の持つ可能性が大きく変化そして進化した。
CANの前にCANは無し
CANの後にもCANは無し!

石野卓球

あらゆる音楽の要素を内包しながら
そのどれとも微妙な距離を保っている感じがして、
いつ聴いても新鮮に聞こえます。

初期CANを聴いた時、
スライの暴動とVUの2ndが融合したような音楽だと思った。
クールで熱い、知的で野蛮、未来的で原始的、シンプルで複雑、
要するにかっこいい音楽の要素が全てここにある

坂本慎太郎

小山田圭吾

第1弾 2020.7.17 OUT

『モンスター・ムーヴィー』(1969年)
2,400円(税抜) / TRCP-262

『エーゲ・バミヤージ』(1972年)
通常盤 : 2,400円(税抜) / TRCP-263
Tシャツ付限定盤も同日発売
『エーゲ・バミヤージ:Tシャツ付限定盤』
5,450円(税抜) / サイズ : S, M, L, XL

『ランデッド』(1975年)
2,400円(税抜) / TRCP-264

『ソウ・ディライト』(1977年)
2,400円(税抜) / TRCP-265

『ディレイ 1968』(1981年)
2,400円(税抜) / TRCP-266

イルミン・シュミット最新ソロ・アルバム
『ノクターン』
2,400円(税抜) / TRCP-261



リイシューシリーズ

・紙ジャケット仕様 ・高音質CD: UHQCD仕様 ・解説付

第2弾 2020.9.25 OUT

『サウンドトラックス』(1970年)
2,400円(税抜) / TRCP-267

『フューチャー・デイズ』(1973年)
2,400円(税抜) / TRCP-268

『アンリミテッド・エディション』(1976年)
2,400円(税抜) / TRCP-269

『アウト・オブ・リーチ』(1978年)
2,400円(税抜) / TRCP-270

『ライト・タイム』(1989年)
2,400円(税抜) / TRCP-271

第3弾 2020.11.27 OUT

『タゴ・マゴ』(1971年)
2,400円(税抜) / TRCP-272

『スーン・オーヴァー・ババルーマ』(1974年)
2,400円(税抜) / TRCP-273

『フロウ・モーション』(1976年)
2,400円(税抜) / TRCP-274

『CAN』(1978年)
2,400円(税抜) / TRCP-275

発掘音源集
『ザ・ロスト・テープス』(2012年)
TRCP-276~278 (3CD)

第4弾 2021.1.15 OUT

ベスト盤
『アンソロジー』(1994年)
2,700円(税抜) / TRCP-278~279 (2CD)

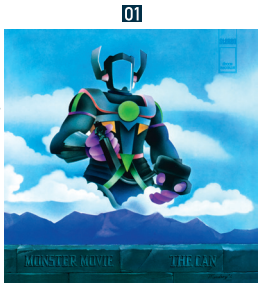
SP00N

mute

<< >>

T

発売元 : Traffic Inc.
trafficjpn.com



『モンスター・ムービー』

後年メディアで“40年先に行く音楽”と讃えられたCANの特異な魅力が最もわかりやすい形で凝縮されたデビュー作。ビートもハーモニーもヴォーカルもロックの定型から激しく逸脱しつつロックのご真ん中を射抜いた怪物。(松山)

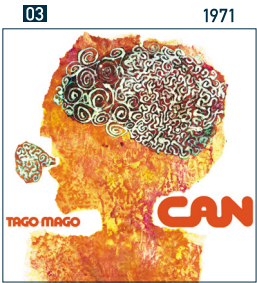
TRCP-262



『サウンドトラックス』

結成当初に担当した映画のサントラ音源を集めた作品だが、独自のサウンド・カラーにブレはない。マルコム・ムーニーとダモ鈴木、二人のシンガーの歌が聴ける唯一の作品でもある。永遠のアンセム“Mother Sky”を収録。(松山)

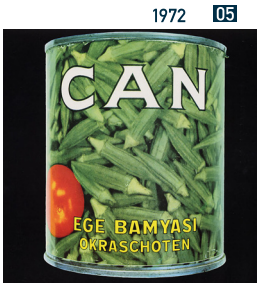
TRCP-267



『タゴ・マゴ』

ダモ鈴木の存在感と演奏陣の即興性と音作りの創造力が三つ巴になった音楽的事件。日本語訛り(ときに日本語詞)の歌を振り立てる演奏とグルーヴの力強さ、5曲目以降にはその元と探究の記録。絶対的な代表作。(松村)

TRCP-272



『エーゲ・バミヤージ』

中期CANの傑作。とくに“Pinch”の唯一無二のファンク・ビートは、エレクトリック・マイルスへのドイツからの回答であり、ポストパンクへの序章。ヒット・シングル曲“Spoon”も収録しつつも、全曲必聴でしょう。(野田)

TRCP-263



『フューチャー・デイズ』

全作品のなかで一二を争う人気作。また、全作品のなかでもっともオプティミスティックなアルバムでもある。表題曲の平和的な響き、温かいポリリズム、空からは心地よい電子音が降り注ぎ、私たちは未来を夢見る。(野田)

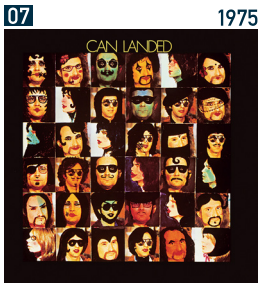
TRCP-268



『スーン・オーヴァー・ババルーマ』

レゲエやラテンやジャズを取り入れながら、レゲエでもラテンでもジャズでもない境地に到達している。そして、“Chain Reaction”と“Quantum Physics”は必聴曲。このアルバムをベストに選ぶ人は少なくない。(野田)

TRCP-273



『ランデッド』

ユーモアはCANの持ち味のひとつだが、本作の魅力はそれをポップに表現している点にある。いわばニューウェイヴの先取りで、音響加工やサウンドカラーを駆使しながらも、今聴くと実にキャッチーな展開。(野田)

TRCP-264



『アンリミテッド・エディション』

CANのワールド・ミュージックの冒険＝通称「疑似民族シリーズ」が聴けるという点において、75年までの未発表音源集でありながら名作のひとつに挙げられている。今聴くと最新の音に思えてならないところが凄い。(野田)

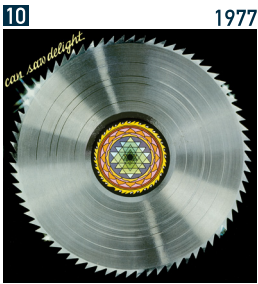
TRCP-269



『フロウ・モーション』

奇種ディスコ・チューンとして英国でヒットした“Want More”他、時代をチラ見したダンスブルな綿菓子のような曲が目立つ一方、疑似民族音楽シリーズの“Smoke”ではCANならではの妄想アフリカ・ドラムも炸裂。(松山)

TRCP-274



『ソウ・ディライト』

シューカイが音響担当にまわり、ベースのジューと打楽器のバーが加わった最初の作品は若返った余勢を駆ったか、探究の途上にあった疑似民族シリーズの旅もアフリカに上陸。草原のごとく爽やかな実験をくりひろげる。(松村)

TRCP-265



『アウト・オブ・リーチ』

シューカイ不参加で、集団内の力学が変化した結果、内容もふんわりし時期は公式ディスコグラフィから割愛の憂き目をみた不幸な作品だが、CANの方法論の臨界点を探る試みも散見でき、いま聴くとかなり興味深い。(松村)

TRCP-270



『CAN』

初のセルフタイトルはラスト・アルバム。満を持してというより消去法でこの表題になったかに見えるラフな内容だが、表現のユーモアと音の記名性は健在。“All The Gates Open”が暗示的。CANはどこまでもCANだった。(松村)

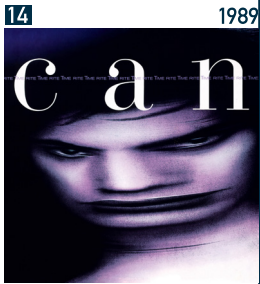
TRCP-275



『ディレイ 1968』

結成当時の発掘音源集は一介のクラウドロッカーが稀代の前衛集団だったことを示す重要作。着火した途端に吹き上がった炎がその赤い舌であたり一面を舐め尽くすような止まぬ不穏さと反復は居並ぶ代表作に遜色なし。(松村)

TRCP-266



『ライト・タイム』

解散していたCANが初代シンガーのマルコム・ムーニーを召還して作った唯一の再結成盤。ダダistスティックとか素頓狂な音作りには各人のソロ・キャリア、とりわけシューカイの音響センスと技能が光っている。(松山)

TRCP-271



『ザ・ロスト・テープス』

スタジオ・セッション、サントラ、ライブなど計30曲の未発表蔵出し音源を集めた驚異の3枚組。約3分の2をダモ在籍時までの音源が占める(インナー・スペース時代もあり)ため、CANの成り立ちと変化がより明瞭にわかる。(松山)

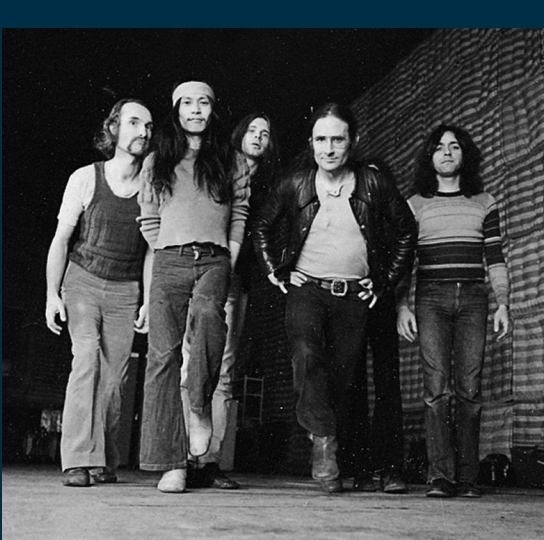
TRCP-276-278



『アンソロジー』

再結成期をふくむ全キャリアからの万遍ないセレクトで入門者はもちろん愛好者もうならせる「選集」はもっと特異な集団として音楽史上でいまなお鈍く輝くCANの魔術的音楽性を濃縮し、来たるべき聴き手を待ち受けている。(松村)

TRCP-278-279



イルミン・シュミット最新ソロ・アルバム『ノクターン』

唯一生き残ったオリジナル・メンバーにして今なお精力的に活動を続けるイルミン・シュミットの最新ライブ盤。『5つのピアノ作品集』(2018年)の収録曲など計3曲における現代音楽的技法や環境音には彼の人生の諸相が刻み込まれている。(松山)

TRCP-261

Text by 松山晋也、野田努、松村正人

www.mute.com
http://www.spoonrecords.com/



発売元: Traffic Inc.
trafficjp.com

CANはドイツのケルンで結成、1969年にデビュー・アルバムを発売。20世紀のコンテンポラリーな音楽現象を全部一緒にしたらどうなるのか。現代音楽の巨匠シュトックハウゼンの元で学んだイルミン・シュミットとホルガー・シューカイ、そしてジャズ・ドラマーのヤキ・リーベツァイト、ロック・ギタリストのミハエル・カロリーの4人が中心となって創り出された革新的な作品の数々は、その後起こったパンク、オルタナティヴ、エレクトロニックといったほぼ全ての音楽ムーヴメントに今なお大きな影響を与え続けている。ダモ鈴木は、ヴォーカリストとしてバンドの黄金期に大いに貢献した。

